

「香散見草」と「梅の花」

学長 塩 崎 均

昭和 60 年秋に近畿大学中央図書館報「香散見草」が創刊されたことを昨年の 42 号（小野村資文先生と香散見草、楠田一夫教授著）を拝読して初めて知った。また、香散見草という見慣れない文字が「梅」を意味すること、また、国文学者の奈古忠國先生の命名であることも学んだ。

私が最も好きな花は「梅花」である。大阪大学の総長であられた赤堀四郎先生が生涯大切にしておられた漢詩がある。「雪埋梅花、不能埋香」というこの詩は、先生が若い研究者の頃に、中国からの留学生が帰国に際して先生に贈った別れの詩である。雪深い初春に、いち早く開花する梅花は雪に埋まってしまう見えなくなってしまうが、その上品な香りは埋められることはない。上品な香りによって梅花が咲いていることが分かる。私も、この詩の梅花のような存在感のある人間になりたいと思ったものである。私が奉職した近畿大学の学園章が奇しくも梅花であり、そこに込められた想いは「梅花霜雪を経て開く」である。また、その花の一部が離れたものになっており、未来志向に基づく内面への未完を意味し、さらに充溢、完熟へと向かう姿勢が一本の強い線で貫かれている。「香散見草」はこの学園章の梅花に由来した誌名であることを知り、一層感慨深い想いがある。

さて、図書館で思い出すことがある。中学生のころは国語が苦手で好きになれなかったが、高校生になって夏目漱石や芥川龍之介など著名な作者の小説を図書館から借りてむさぼり読むようになり、瞬く間に国語の成績が向上した。さらに読書の習慣が身に付き、未だに読書が好きである。小説から哲学書（随

分読んだが身に付いていない）、歴史書（日本史、世界史、人物史）、現在は思想・教育本（論語、仏教をはじめ生き方に関する本が多い）に興味がある。

私の大切にしている言葉に「人間生きていくのに、一冊の本、一人の友、一つの夢、があればいい」というものがあります。新米の学長として今年度の入学生に贈ったメッセージである。ここで言う一冊の本とは人間としての誇りであり、アイデンティティーであり、生きるための哲学であると思います。グローバル化に対応できる人材とは自分自身の一冊の本を持っている人ではないでしょうか。この一冊の本を探し出すために、多くの本を読み、考えることが人生を豊かにしてくれると思いますし、私もこの一冊の本を探し求めている毎日を過ごし続けて生きて行きたいと思っております。



『香散見草』創刊号